

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

移住の表象：コリアン・ディアスポラのアート

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2009-04-28<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 金, 恵信<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.15021/00001430">https://doi.org/10.15021/00001430</a>                 |

## 移住の表象 コリアン・ディアスポラのアート

キム ヘシン  
金 惠信

学習院大学講師（美術史、表象文化論）

### はじめに：コリアン・ディアスポラの表象と語りの場 ——ビエンナーレと国際シンポジウム

コリアン・ディアスポラとは、19世紀末の列強による侵略、日本による植民地支配、さらに南北分断と冷戦体制という歴史を経てきた結果、朝鮮半島から、日本、中国、旧ソ連の中央アジア諸国、アメリカ合州国、ブラジルなどの世界各地に離散した、総計500万人にもおよぶ人々とその子孫を指す〔徐2004〕。現在、コリアン・ディアスポラは、世界160ヶ国に500~600万人が居住しており、これは世界で4番目の規模のディアスポラ集団とされる。

コリアン・ディアスポラとそのアートに関心を持ちはじめたのは、2001年のはじめのことだった。翌年の光州ビエンナーレに、世界各地に住むコリアン・ディアスポラをテーマとするプロジェクトが含まれるということを知った。そして9月には、光州のプロジェクトの企画者である、在アメリカの韓国人アーティスト、ヨンスン・ミンが率いるリサーチ・チームが、展覧会のためのアジア地域調査旅行のため日本に来ることになった。しかしこの調査日程は、あの9・11の出来事で、当初のスケジュールを大幅に縮小、変更し、厳しい日程のなかで進められることになった。私も調査チームが東京で在日のアーティストや研究者たちと持った会合に参加した。ヨンスン・ミンの作品にはそれ以前から興味を持っていたので、コリアン・ディアスポラのアーティストでもある彼女が企画する展示がどのようなものになるのかが大きな楽しみだった。

展示は、2002年光州ビエンナーレの企画展示のひとつとして、「そこ、離散の地」展というタイトルで開催された。そして、その展示のコンセプトと問題意識を共有し、さらなる検証を試みたのが、2004年東京で、2004年東京経済大学国際学術シンポジウム「ディアスポラ・アートの現在——コリアン・ディアスポラを中心に」だった。

私は、韓国近現代期の美術を中心とする視覚表象のイメージ分析を研究テーマとしているが、とくに歴史とそれをめぐる記憶の表象の観点から、コリアン・ディアスポラとそのアートについて考察したいと思っている。ここでは、その途上における位置確認として、韓国でのビエンナーレ展示と日本での国際シンポジウムにおけるコリアン・ディアスポラの姿を書きとめてみたい。

## 1 光州ビエンナーレ「そこ、離散の地」展 (THERE Sites of Korean Diaspora)

光州ビエンナーレは、ジョルナムドクァンジェ韓国全羅南道光州広域市で1995年に始まり、2年毎に開催される国際美術展である。回毎にメインテーマがあり、第1回展(1995年9月20日~11月20日)は「境界を超えて」、第2回展(1997年9月1日~11月27日)は「地球の余白」、第3回展(2000年3月29日~6月7日)は「人+間」、第4回展(2002年3月29日~6月29日)は「一時停止, Pause, 止」、第5回展(2004年9月10日~11月13日)は「埃」だった。ビエンナーレは全体テーマを掲げたメイン展示といくつかの企画展示で構成される。「そこ、離散の地」展は、2002年の光州ビエンナーレのプロジェクト2の展示だった。この企画がビエンナーレの中でどういう位置にあるのかを把握するため、展示コンセプトと構成を記す。

### 1) 2002年光州ビエンナーレ

#### ●テーマ「멈춤 (モムチュム=止まる, 一時停止), PAUSE, 止」

「・・・モムチュム, PAUSE, 止, というテーマは・・・今までの慣性に対する批判的省察とその対案を模索することの緊急性を思い起こすために選択された。…既存の古い思想, 古い制度, 慣例を捨てることは決して容易ではないが, だからといって, その重要性がなくなることはない。」<sup>1)</sup>

#### ●構成

##### ○プロジェクト1「モムチュム Pause」メイン・ホール, 第1-4, 6展示室

参加作家は, 27のアーティスト集団を含む92名のアーティスト。

「地球規模の資本主義経済システムに対する批判, その対案として, より地域中心で, 具体的な交換とコミュニケーションの可能性を探る」

##### ○プロジェクト3「執行猶予 Stay of Execution」5・18自由公園(憲兵隊跡地)

参加作家は, 約51人。

民衆の闘い, 人権関連ドキュメンタリー映画上映会をあわせて開催。

「軍事政権が光州民衆抗争関連者たちを懲罰した憲兵隊の跡地, 5・18自由公園内の保存空間で行われるこの展示は, 近代化, 民主化, 都市化の現象が同時に見られる, いわゆる『場所特殊性 Site Specific』の性格を持つ。つまり, 歴史的場所の持つ特殊性を解釈することで, 抗争の現在の意味を探ることである。」

##### ○プロジェクト4「接続 Connection」都心鉄道廃線跡地

参加作家は, 21人+学生作品展。

廃線の跡地をどういう空間にするかという議論に対する政策提案型公共芸術プロジェ

クト。再利用, 大地美術, 野外博物館, 建築的風景, 臨時構造物, 野外教室, 都市の憩いの空間などの新しい機能と役割を提案する展示。

## ■「そこ, 離散の地 THERE Sites of Korean Diaspora」

### ●対象地域

Almaty (Kazakhstan) + Los Angeles (U.S.A) + Yanbian (China) + Sao Paulo (Brazil)  
+ Osaka (Japan)

### ●展示コンセプト

「『ディアスポラのアーティストは, 民族アーティスト』のカテゴリーに受容されず, 特定の経験, 特定の文化, 特定の歴史から生まれ, 特定の地域から語る『新たな民族性』を見せながら, 『差異を抑圧するのではなく, 受容する文化の政治学』の活気をもつ芸術の作り手」<sup>2)</sup>

●企画者 (キュレーター): ヨンスン・ミン (アーティスト, UCアーバイン校準教授)

●企画参加者: スヨン・チン (人類学者, クレアモント大学助教授, 米コリアン・アメリカンミュージアム館長), ポール・イ (映画作家, キュレーター)

●展示デザイン: ロナルド・ストロード (米ジャパニーズ・アメリカンミュージアム展示デザイナー)

### ●構成

①作品展示: コリアン・ディアスポラの5つの代表的居住地域に住むアーティスト57人の作品。

②年代記: 韓国人の海外移住の歴史資料を通路に展示。

③ドキュメンタリー: リサーチ旅行中撮影した現地の映像とインタビューを基に制作した芸術ドキュメンタリーを展示場入り口で上映。

④映画・ビデオプログラム: 海外居住コリアン映画監督の作品上映。

⑤シンポジウム: コリアン・ディアスポラに関する国際シンポジウム——未開催。

### ●企画の目的

コリアン・ディアスポラ, そしてディアスポラ現象をめぐって行われてきた調査研究と言説に対する関心と理解を呼びかけること。

以上、展示概要からもわかるように、この展示は、コリアン・ディアスポラという一種の「想像の共同体」を、歴史的産物としてとらえ、その表象の問題を問う試みだったといえる。そのため、展示は対象地域のアーティストたちの作品を中心に、コリアン・ディアスポラの歴史を視覚的に示すものになった。展示図録には、企画者たちが展示のコンセプトに沿って作成した歴史資料と人類学的調査資料が、もうひとつの視覚展示となっていた。掲載論文を含むすべての文は、韓国語文の下に英文が併記され、そのレイアウト

トは、まるでふたつの声の同時のナレーションを読むようでもあり、読み手が切り替えられる二重音声構造のようでもあった。

前にも述べたとおり、この展示のリサーチは、9・11の影響で日程と内容両方で、大幅な縮小を余儀なくされた。また、それ以外の諸事情で中国大陸の朝鮮族と南米地域のコリアン・ディアスポラのアーティストの作品は展示することができなかった。展示場のパネルと図録の文字および写真資料は、それらの空白を補う役割を持っていた。次はその一部である。

### ■コリアン・ディアスポラの歴史——なぜ「そこ」なのか？<sup>3)</sup>

Why There : Sites of Korean Diaspora

1231 蒙古襲来 20万人余の高麗人、蒙古によって満州と中国へ強制移住

壬申の乱（イムジンウエラン）で、多くの朝鮮半島の人が日本へ強制移住

高麗人を自称する朝鮮の人たちがロシア極東地域へ移住——1999年現在、カザフスタンに9万9,664人、ウズベキスタンに20万9,500人

約7万7,000人の韓民族満州定着

韓国人労働者102人ハワイ移住——2000年現在、アメリカ全域に120万人

1904-05 日露戦争 ロシア居住韓国人を内陸の収用所に強制移住

1910-45 独立運動家を含む韓国人33万人中国移住、1990年192万3,000人

日本本土への移住（強制徴用など）——1945年200万人。現在約60万人

1965年から 南米地域への労働移民——2000年現在、ブラジルに約4万5,000人

[作成:スヨン・チン (Soo Young Chin, 人類学者, クレアモント大学助教授, 米コリアン・アメリカンミュージアム館長)] 参照: イ・グアングユ 『재외동포』 (在外同胞) ソウル 大学出版部2000]

### ■エッセイ

「コリヨサラム（高麗人）の告白 *Confession of Kore Saram*」 German Nickolaivich Kim (Almaty)

「アメリカの中のコリアン *Locating Korean in America*」 Elain H.Kim (L.A)

「中国朝鮮族: 私たちは誰? *Ethnic Koreans in China: Who are We?*」 Yun San Ryu (Yanbian)

詩「慶州」 Hak Chun Kim

「ブラジルのコリアン, その驚異の謎 *The Amazing Riddle of Korean in Brazil*」 Woo Jin Kim (San Paulo)

「星 *Stars*」 Kim Chang Saeng (Osaka) 詩「輪廻の五月」 Chog Chu-Wol

もちろん、それでもなお限界と問題点は残る。ひとつは、企画者全員がアメリカ西海

岸在住のコリアン・アメリカンであることであること、もうひとつは、光州ビエンナーレの中の一企画という性格上、この展示は韓国政府の支援を受け、大韓民国で開催されるという状況である。そこには、歴史（時間）と地域（空間）を飛び越え、すべてのコリアン・ディアスポラを我々韓国人とする、ナショナリズムの暴力性が潜んでいる可能性を見逃してはならない。そういう意味で、企画者ミン・ヨンスンの「『そこ』は、ここからの眼差しを受けていることを忘れてはならない」という指摘は重要である。「そこ、離散の地」展は、「誰が、どこで、何を、誰に、どのように、見せるのか？」という、そういう意味で視覚イメージ展示の大前提を念頭に置き、並べられたイメージが発するメッセージを読み解いていくことの必要性に気付かせてくれた展示だったといえる。

## 2 2004国際学術シンポジウム「ディアスポラ・アートの現在——コリアン・ディアスポラを中心に」(Diaspora and Art in Today's World - Focus on the Korean Diaspora)

「そこ、離散の地」展では、さまざまな事情で実現できなかった企画がひとつあった。学術シンポジウムである。展示コンセプトの設定段階から関連領域の研究者たちが関わったことを考えると、展示から見えてきたものや浮かび上がった問題点について議論を交わす場が実現できなかったことは、企画者と関係者にも心残りだった。

「ディアスポラ・アートの現在——コリアン・ディアスポラを中心に」(以下、「ディアスポラ・シンポジウム」)は、「そこ、離散の地」展の問題意識を受け、展示に何らかのかたちで関わった在日の研究者たちが中心となって、光州ビエンナーレから約2年半後の2004年11月、東京で実現させたシンポジウムである。2日間にわたって行われたシンポジウム〔表1〕は、アーティストと研究者たちが一堂に会し、コリアン・ディアスポラの作品と言説をめぐる議論ができた画期的な集まりだった。シンポジウム期間中、参加したアメリカ、カナダ、ドイツ、ベルギー、日本、韓国からのコリアン・ディアスポラ・アーティストたちの作品が展示された。1日目には、参加アーティストたちが自分の作品について語り、観客の質問に答える、アーティスト・トークが行われた。参加アーティストのプロフィールとシンポジウムによせたコメントは次のとおりである<sup>4)</sup>。

### ■展示

#### ●コーディネーター：嶋田美子（しまだ・よしこ）Shimada Yoshiko

東京に生まれる。高校卒業後、カリフォルニア州スクリpps大学に留学。93年に渡独、94年からベルリンのキュンストラーハウス・ベタニエンのゲスト・アーティストとして、98年から99年にニューヨークのPS1でレジデント・アーティスト。1930、40年代の日本の女性と戦争や、従軍慰安婦をテーマに、日本人の意識や構造を問題

にした作品を制作。主な展覧会には「ジェンダー 記憶の淵から」展（東京都写真美術館 1996年）、「There」展（韓国・光州ビエンナーレ・プロジェクト2 2002年）、City\_net Asia Project “urban relationship sustainable”展（ソウル美術館 2003年）など。

#### ●参加アーティスト

デヴィッド・カン (David Khang)

心理学、神学、建築、歯科医療など多様な教育歴から学んだ知識を取り入れたアート制作に取り組んでいる。NYのクーバー・ユニオン校（1998）とソウルのホンイク（Hong-Ik）大学に通った後、エミリー・カー研究所で、美術学士（BFA）を取得し（2000）、カリフォルニア州立大学アーバイン校で、批判理論に重点をおいた美学修士（MFA）を取得した（2004）。書き言葉であれ、話し言葉であれ、視覚的言語と戯れる。最近の作品では、歴史的・政治的意味合いを提示する言語を「遂行（パ）・（フォ）上演（一）する（ム）」ために、切断された発話器官を活用している。作品はソウル、ニューヨーク、ロサンゼルス、バンクーバーで展示・上演された。

【ひと言】アート、言語、文化の関係と、これらの諸関係の歴史的かつ政治的意味合いを掘り下げたい。

ヨンスン・ミン (Yong soon Min)

ロサンゼルスをベースにして活動しているアーティスト、教育者、インディペンデント・キュレーター。彼女のマルチメディアのインスタレーションは、社会的正義を求める運動と、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル・スタディーズの研究に裏打ちされたもので、広く展示されてきた。現在のプロジェクトは、移住、労働、アイデンティティの間の関係を掘り下げる。

【ひと言】トランスナショナルな移動やディアスポラのコンテキストの中で、アイデンティティやナショナリズムの問題に、私のアート制作と学芸員としての実践をどのように関わらせて取り組んでいくのかということについて語りたい。

ソン・ヒョンスク (Song Hyun-Sook)

全南潭陽郡大徳面撫月里生まれで 1972年看護補助員としてドイツに派遣され、4年間病院で勤めた。その後ドイツで美術勉強をした後現在まで画家に活動してドイツで暮している。

【ひと言】わたしは、自分だけの秘密を持つようになった幼い時から、文字のかわりにドローイングで日記をつけ始めた。電気も入らない韓国の山奥に生まれた者にとって、ドイツでの生活はまさにカルチャーショックそのものだった。新しいものとの疎

通の不可能性、または置いてきたものに対する懐かしい心境は、まるで言葉を喋れない者の筆談みたいに、いくつかの線で表現されるようになった。

ミヒ=ナタリー・ルモワンス (Mihee-Nathalie Lemoine)

マルチメディア・アーティスト、アクティビスト。韓国生まれで、幼児期にフランス語を話すベルギーの里親のもとに出される。映画、ビデオ、絵画、詩を制作。1993年以来ソウルをベースに活動中。作品は複数の国で刊行されている。ブリュッセル・マルチメディア・センター、ウイコンシン大学から助成を受ける。ブリュッセル・ショートフィルム・フェスティバル、ソウル・ドキュメンタリー・フィルム・フェスティバルにて受賞。韓国、台湾、香港、ドイツ、米国、カナダにて個展、グループ展多数。養子に対する権利獲得や実親調査のための活動も展開中。

詳しくは、<http://www.chomihee.org> - [www.okaybook.com](http://www.okaybook.com)

【ひと言】 エスニシティ、ディスコネクション (切断) / あなたの心を開きなさい  
マイノリティと承認 / 対話を開こう  
ディスプレイメント (転位, 置換, 排除) の経験 / 議論を開こう  
アートとアクティヴィズムを通して / 意識を開こう

呉夏枝 (オ・ハジ) (Oh Haji)

1976年大阪生まれ。京都市立芸術大学、大学院にて染織を専攻。学部の卒業制作から民族衣装をモチーフに制作を開始。学部、大学院卒業制作にて受賞。2002年から2年間渡韓。韓国の民族衣装について学ぶ。京都、韓国などで、個展、グループ展多数

【ひと言】 まだまだ表現者として未熟な私がこの会議に参加させていただくことになり、大変うれしく思っています。会議に参加される方々と発展的で刺激的で、想像的な交流ができることを期待しています。

皇甫康子 (ファンボ・カンチャ) (Hwangbo Kangja)

1957年、大阪生まれの在日朝鮮人2.5世。マイノリティ・アーティスト。1996年、ドキュメンタリービデオ「イヂェプト (今から)——世代を継いで生きる在日朝鮮人女性たち——」制作。2001年、バンクーバー「センターA」で嶋田美子との共同制作、「在日」の家族写真展。2002年、光州ビエンナーレ、ディアスポラ・アートに「在日」の家族写真を出品。

【ひと言】 教育現場で悪戦苦闘している毎日です。

高山登 (たかやま・のぼる) (Takayama Noboru)

1944年東京生まれ。1968年に東京芸術大学油画卒業。1970年、東京芸術大学美術研究



科油画専攻終了。1973年にパリ・ビエンナーレ。1983年には第1回宮城の5人展（宮城県美術館）。1988年「白州・夏・フェスティバル」（山梨県白州町）。1995年ヴェネチア・ビエンナーレ・アジアの現代美術。1996年、光州ビエンナーレ・地球の余白。2000年光州ビエンナーレ・日韓現代美術の断面。現在、宮城教育大学教授。

【ひと言】 今日状況の中で新しい問題と出会えればと期待しております。

朝鮮大学美術科研究員グループ (Research fellows of the Korea University, Fine Arts Course)

金勉植 (キム・ミョンシク) 1983年兵庫生まれ。現在、朝鮮大学校美術科研究員2年生。

裴淳玉 (ペ・スノク) 1982年宮城生まれ。現在、朝鮮大学校美術科研究員2年生。

朱宰浩 (チュ・ジェホ) 1982年兵庫生まれ。現在、朝鮮大学校美術科研究員1年生。

グループ展2004「tokyo marble POLKA」在日コリアン・アーティスト・ネットワーク「アルンアートネットワーク」が行っている「Neo Vessel アルン'04'05」(京都)との連動企画。

【ひと言】 めくられたページに葉をつける。物語を読み続けるにはとても大切なことだ。

展示作品は、平面 (ソン・ヒョンスク, ミヒ=ナタリー・ルモワンス, 金勉植, 朱宰浩, 裴淳玉), ビデオ映像 (ヨンスン・ミン, ソン・ヒョンスク), インスタレーション (裴淳玉, 呉夏枝), インスタレーションの写真展示 (高山登), 写真 (皇浦康子), パフォーマンス (デヴィッド・カン) など、現代美術展示で見られるほぼすべてのジャンルを含んでいた。

2日目に開かれたシンポジウムでは、参加アーティストたちも報告を行った。

「そこ、離散の地」展の企画者ヨンスン・ミンは、「下からのトランスナショナリズム」という題の報告で、彼女自身の近作を中心に移住労働者の問題について述べた。ヨンスン・ミンが、2004年、ソウルで、パートナーのAllan de Souza とのコラボレーションで開いた「XEN——移住労働とアイデンティティ」展(2004年8月～9月 ソウル,サムジ・スペース)は、この問題を韓国内に急増する外国人労働者も含めて考える作業だった。韓国国内の外国人移住労働者は、2001年の調査で約30万人にのぼる。出身国は、バングラデシュ、スリランカ、ネパール、ミャンマー、パキスタン、フィリピン、インドネシアなどである。ヨンスン・ミンは、彼女ら彼らとビデオ・インタビューを行い、観客が直接内容を聞けるように、ビデオ・カメラとヘッドフォンを床に並べた。別の部屋では、ソウル市内で、韓国政府の外国人労働者対策について抗議をする労働者たちを撮った映像を、四方の壁に帯状に流すインスタレーション作業を行った。観客たちは、韓国語を流暢に話す外国人労働者たちが、自分たちと一緒に韓国社会を構成する一員であるということに気づかされる。

シンポジウムでは、アーティスト・トークでこの展示の様子がビデオで紹介され、報告で作品製作のコンセプトが語られた。ヨンスン・ミンによると、展示のタイトル「XEN (Zen禪)」は、「xenophobia」=外国(人)嫌い と「xenophilia」=外国(人)好き、の両方を意味している。報告文の見出しは、「移住」と「外国人」にかかわる文字情報と言説でありながら、彼女が作品をとおして発したいメッセージへの吊り橋のようだった。その一部を書き出してみる。

「人間と市民の間にある暗礁、それが外国人」

「世界の35人に1人は移民である」

「よそ者だと、誰もあなたの名前を覚えてくれない」「外国人は私たちの中に生きている…私たちのアイデンティティの隠れた顔である…外国人は、差異の意識がわき起こったときに現れ、そして私たちみんなが自分自身を外国人として認識したときに消えるのである」

「それでも私たちは確信できるだろうか。外国人恐怖症という「政治的な」感情が、しばしば無意識に、unheimlichと呼ばれる、英語ではuncannyと、そしてギリシャ語では分かりやすく xenosと呼ばれる、つまり「不気味さ」というあのおびえた喜びの苦しみを含んでいないと」「そして精神分析は、他の人間や自分自身の他者性への旅、相容れない人たちをも尊重するという倫理性に向かっての旅として経験される」「不気味であること、異質であることは、私たち自身の中にある：私たちは内なる外国人なのだ。私たちは、分裂した存在なのだ」

このシンポジウムは、徐京植が言っているように、「ポスト・コロニアル時代における「文化」の断絶と継承、変容と発展の様態を、「ディアスポラ」と「アート」という二つのアスペクトが交差するトポスにおいて考察する」場であった。

世界各国で盛んに行われているビエンナーレの展示からも分かるように、現代美術展示は、それ自体グローバリズムの政治的・経済的力関係が、視覚文化のかたちであらわれる場である。このシンポジウムは、研究者とアーティストの学際的議論を通じて、ディアスポラという概念とその表象としての芸術作品を考察し、多くの問いかけを残した貴重なものだった。

## おわりに：ディアスポラ——自己と他者を認識する吊り橋

私は1997年の第2回目から光州ビエンナーレを訪ねている。その中でも「そこ、離散の地」展は、国際美術展で必ず考えるべき問題を提起する企画展であった。「ディアスポラ・アートの現在——コリアン・ディアスポラを中心に」には実行委員の一人として企画に参加した。この二つの催しは、参加者と関係者の一部を共有しており、その多くが「ディアスポラ」か「移住労働者」でもあった。作品をつくる者は、作品の中で、言説を語る者は書くものの中で、自らのアイデンティティを問い、問われる。

ヨンスン・ミンは、シンポジウムの報告文の最後で重要な指摘を行っている。

「あらゆる形態の移住も、始まり／結びの弁証法で、社会文化的な変化をもたらす。自信喪失している社会は、未来に不安を抱き、移住が関係の枠組みを変えてしまうのではないかと怖れている。逆に言えば、自分が何者であるかについて揺るぎのないしっかりとした考えを持つ、強くてバランスのとれた社会は、移住によって自分たちが豊かになることを知っている。」

彼女は、ここでOorinaratismという用語を使っている。Oorinara=ウリナラ=我が国とism=主義を合体させたハングルの造語で、民族主義やナショナリズムを意味する。かつて被支配の歴史を経験した韓国、経済発展で第3世界の労働者が入ってくるようになった今の韓国、その二つの顔に潜むナショナリズムは深刻な問題である。

「ディアスポラ・シンポジウム」の主催者徐京植は、基調報告「なぜ、コリアン・ディアスポラ・アートを問題にするのか」の中で、コリアン・ディアスポラという概念を問いながら、現代社会におけるディアスポラとアート考察の意義を探る。

「コリアン・ディアスポラ・アート」というカテゴリーは成立するのか。それを成立させる、ある種の「共通性」を、この人々のアートから読み取れるのか、という問題がある。この「共通性」に該当するものは、「血統」という観念ではなく、また、「民族語」や「民族文化」の共通性という近代的な通念でもない。一つの仮説として、それは朝鮮(韓国)民族として近現代に味わうことになった歴史的経験の共通性であると考えられる。被植民地支配と民族分断という集团的経験を「分母」として共有している存在が「コリアン・ディアスポラ」であるということだ。しかし、この「共通性」がおのおののアートにどのように現れているか、はたしてそれを「共通性」と呼びうるか、という問いに答えるのは難しい。」

「ディアスポラは戦争の結果として生み出される。戦争が「国家」や「国民」という近代的な枠組みを前提とする出来事であり、ディアスポラがその枠組みからはみ出た存在であることを考えれば、現在、ディアスポラ・アートを考察するという私たちの行為は、戦争阻止と平和構築という緊急の課題に結び付くはずである。

「韓国で作られたもの、移住者によって作られたもの」「境界というのは、知性の研究所であり、複数の文化の複雑な関係を探求する概念の領域なのである。」「1945年、日本の35年にわたる植民地支配からの独立の直前には、朝鮮人の5分の1近くが、故国の外に暮らしていた。スターリンの民族浄化の犠牲になり、ソビエト極東部から中央アジアの強制収容所に送られた人もいた。現在のところ、朝鮮は、160カ国に推定600万の朝鮮人が暮らすという、世界で4番目のディアスポラになっている。」

ディアスポラの研究者であり、表現者でもある二人の指摘は、自らの立場を問いながら、作品を制作し、研究を行うという、ディアスポラのアーティストと知識人の状況を物語っていると言えよう。今後は、グローバリズムにおける美術展示の側面を踏まえながら、移住とその視覚的表現についてさらに考察していきたい。

表1 「ディアスポラ・アートの現在——コリアン・ディアスポラを中心に」 プログラム  
 Diaspora and Art in Today's World - Focus on the Korean Diaspora  
 2004年東京経済大学国際学術シンポジウム 2004年11月27日, 28日

|  |   |
|--|---|
| <p>11月27日 (土)</p> <p>国際シンポジウム 第1日目<br/>6号館7F大会議室</p> <p>12:00 開場<br/>13:00 開会挨拶<br/>13:10 オリエンテーション<br/>(スケジュール・会場などの説明)</p> <p>13:30 アーティスト・トーク<br/>◎コーディネーター: 嶋田美子<br/>【アーティスト】<br/>・ヨンスン・ミン<br/>・ミヒ=ナタリー・ルモワンス<br/>・ソン・ヒョンスク</p> <p>《休憩&amp;パフォーマンス》<br/>・デヴィッド・カン<br/>場所: 6号館前 中庭<br/>時間: 15:00-15:20</p> <p>・皇甫康子/ 呉夏枝<br/>・朝鮮大学校 美術科 研究員<br/>金勉植 裴淳玉 朱宰浩<br/>・高山登 / デヴィッド・カン</p> <p>19:00 第1日目終了</p> | <p>11月28日(日)</p> <p>国際シンポジウム 第2日目<br/>6号館7F大会議室</p> <p>9:30 開場<br/>10:00-10:40 基調報告<br/>徐京植 (東京経済大学)</p> <p>第1部 「下からのトランスナショナリズム」<br/>10:40-12:25<br/>司会: 嶋田美子<br/>報告: ヨンスン・ミン<br/>コメント: 北原恵 (甲南大学)</p> <p>《12:25-13:45 昼食・休憩》</p> <p>第2部 「私のディアスポリズム: アクティ<br/>ヴィズムの中のアート」<br/>13:45-15:30<br/>司会: 池内靖子 (立命館大学)<br/>報告: ミヒ=ナタリー・ルモワンス<br/>コメント: レベッカ・ジェニソン<br/>(京都精華大学)</p> <p>《15:30-15:45 コーヒーブレイク》</p> <p>第3部 「ディアスポラの名前・歴史・アート」<br/>15:45-17:30<br/>司会: 北原恵<br/>報告: 李孝徳 (東京外大)<br/>コメント: 金善姫 (森美術館)</p> <p>《17:30-17:45 コーヒーブレイク》</p> <p>総括討論 ディアスポラ・アートをめぐって<br/>17:45-19:25<br/>司会: 徐京植+池内靖子</p> <p>閉会 19:30</p> |
|--|---|

## 注

- 1) 芸術監督ソン・ワンキョンの序文から抜粋。
- 2) ジャマイカ出身のイギリス文化理論研究者スチュアート・ホールを引用, 展示企画者ヨンスン・ミンによる図録掲載論文「いくつかの緯度&芸術 Certain Latitudes&Art」から。
- 3) 作成: スヨン・チン (Soo Young Chin, 人類学者, クレアモント大学助教授, 米コリアン・アメリカンミュージアム館長) 参照: イ・グアンギョ 『재외동포』 (在外同胞) ソウル大学出版部2000。
- 4) シンポジウムパンフレットから。

## 文 献

Barker, Emma

1999 “*Contemporary Cultures of Display*”, Yale University Press

テレサ・ハッキョン・チャ

2003 『ディクテ——韓国系アメリカ人女性アーティストによる自伝的エクリチュール』池内靖子訳 青土社。(Theresa Hakkyung Cha, 1982, “*Dictee*”, Tanam Press)

レイ・チョウ

1998 『ディアスポラの知識人』本橋哲也訳 青土社。(Rey Chow, 1993, “*Writing Diaspora*”, Indiana University Press)

Kim, Elaine and Choi, Chungmoo

1997 “*Dangerous Women*”, Taylor & Francis Routledge

ソキョンシク  
徐京植

2005 『ディアスポラ紀行』岩波新書。

ソキョンシク  
徐京植・高橋哲哉

2000 『断絶の世紀 証言の時代——戦争の記憶をめぐる対話』岩波書店。

東京経済大学学術研究センター

2004 『東京経済大学学術研究センター年報』5号, 東京経済大学学術研究センター。

上野俊哉・毛利嘉孝

2000 『カルチュラル・スタディーズ入門』ちくま新書, pp.186-205。

2002光州ビエンナーレ図録

2002 『THERE: Sites of Korean Diaspora Gwangju Biennale 2002 Project 2』, 2002光州ビエンナーレ図録。